

中国の大学の日本語専攻主幹科目への グループワークの提案 —言語生態の保全の観点から—

楊 峻

学位取得年月：平成 22 年 3 月
取得学位名：人文科学博士
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】言語生態学、言語生態の保全、協働学習、グループワーク、精読授業
【要旨】

中国の大学で日本語専攻の学習者は日本語に関する知識が豊富であるが、その知識は運用に結びついていない状態にある。本研究では、言語生態学からこの問題を捉え、既存能力を重視する「言語教育への生態学的アプローチ」から、日本語専攻学習者の日本語の生態の保全を目指す。それを実現するために、日本語専攻の主幹科目である精読授業にグループワークを導入することを具体的に提起する。

言語生態を保全するには、まず社会的領域と心理的領域の両方を含む言語生態環境を改善する必要がある。言語生態環境の改善を通して、言語の生態が保全されていくと想定される。本研究では、この枠組みを踏まえ、日本語専攻学習者の日本語の生態の保全を目指して、具体的なグループワークが提起できるように、日本語専攻の主幹科目である精読授業にグループワークの会話活動と翻訳活動を導入した。導入されたグループワークは、日本語生態の保全に寄与するかどうかを調べるために、4つの研究を行った。

研究1では、言語生態環境の社会的領域の観点から、グループワークにおける学習の質の問題を取り上げて活動中のやりとりを分析した。その結果、グループワークにおいて、学習者は高い完成度で学習を進められ、グループワークにおける学習の質が保証されていることが分かった。この結果から、グループワークの導入を通して言語生態環境の社会的領域に改善が見られたと考えられる。

続いて、研究2と研究3では、グループワーク導入後の言語生態環境の心理的領域の実態に注目し、グループワークと学習者の持つ言語学習観との関係を検討した。

研究2では、グループワークを実施する前後の質問紙調査を通して、学習者の持つ言語学習観の全体像と特徴を探った。言語学習観の変化方向から、プラス志向の変化は翻訳活動と関係があり、マイナス志向の変化は会話活動と関係があることが推測された。研究3では、学習者の言語学習観をより正確に理解するために、学習者の会話活動と翻訳活動に対する受け止め方の形成プロセスを質的に探った。研究2と研究3から、翻訳活動によって学習者の持つ言語学習観はプラス志向へと変化し、活動に対する肯定的な受け止め方が形成されている。このことから、翻訳活動は、学習者の持つ言語学習観が十分に生かされ、学習者の言語生態環境の心理的領域の改善を果たしていると考えられる。

研究1から研究3の結果から、翻訳活動は、言語生態環境の社会的領域と心理的領域両方の改善に寄与することが窺われる。このことから、翻訳活動においては、学習者の日本語生態が保全された状態にあると推測される。その実際を明らかにするために、研究4では、言語生態保全の観点から、学習者の持つ言語が会話活動と翻訳活動でどのように使われ、どんな機能を果たしていたかを探った。その結果、日本語をベース言語とした会話活動においては、学習者が本来持っている既存能力を発揮することが難しいことが観察された。一方、翻訳活動では、母語である中国語がベース言語として使われているため、母語で培ってきた既存能力が互いに連結した形で発動され、学習者は他者と協力的関係をつくる高次レベルの学習が実現されていたことが窺われる。言語生態保全の観点から捉えると、翻訳活動においては、学習者の言語生態と人間生態両方ともよい状態に保たれ、学習者の日本語生態が保全されていると言える。

以上の研究結果を踏まえて、本研究では、高度な日本語運用の担保、母語の活用、技能別の学習活動間の連結、タスク内容の4点から、グループワークのデザインを提起した。

(やん じゅん)